

ぶ儲君親王よりは、だんし十帖鳥子一まいをよこにをりて、たてに中央におしをりて、又三ッにをの帯の如くにして、さし入、是を一帖として十帖重れ、杉原の帯の如くには、いにはいし一つ、み又鳥子をたいみて捻の紐とする也、紐のたけは、は恰好次第に調るなり、にはいし一つ、みをすへて参る、陽明よりは、中高だんし十帖に御扇参る、勾當内侍よりは、だんし十帖御帶二すち参る、飛鳥井よりは、たんざく百枚、柳筥にすゑて参る、高倉よりは、だんし十帖に御くみかけ二すち参る、みなせよりは、御やうじの木一ゆひ、帯二本参る、てんやくの頭よりは、さかう丸嶋の社務は、むしこなど、えん上す、これらは、大方定りたる事也、其外諸家は、大概御太刀を進上す、人々の名字を書て札を附、札ばかりをと、めおかれて、太刀をかへしたふ、將軍家よりは、馬太刀進上也、太刀は、此御所のを申出して進上の分也、だいはん所の妻戸より、勾當内侍とり入、武家傳奏披露也、元は、太刀も、えん上とみえたり、舊院ゆどの、上の日記などには、銘など、えんしてあり、いつ比より申出さる、事にてや、馬は、左右馬れうの官人引て出朝がれ、ひにて御覽あり、御返しには、大たかだんし十帖に、うち枝此橋の枝の七勅作入てたふ、陰陽頭札進上、御てんの柱におさる、牛かひ御禮に参る、正月に同じ、あさ盃、あさがれひ等みな例のごとし、夕方の御祝、初獻に、すべてをばなのかゆはしぎのを供す、是も初獻のうち也、六月朔日のこほりもちるなどの類也、まるるやうもおなじ。

〔内院年中行事〕八月 一朔日タノモノ御祝トシテ、色々ノ物、院中、宮々方へまいらせラル、又方々ヨリモ獻之、御盃事如常、

一タノモト云事ハ、田實ト云事也、此事後嵯峨院御時ヨリ初ル事也、未御里ニ御座アル時、諸臣ヨリ當年ノ田ノ實ト云テ、米初尾ヲ獻ズ、其後不慮ノ御位ヲモタセラル、其吉例ナリトテ、御在位ノ時皆獻之故實也、依今ニ諸臣女官マデモ遵之也、此外不及見、不知也、

〔辨内侍日記上〕寛元五年寶治元年八月一日、中宮の御方よりまいりたりし御たきものよのつねな